学校を創る

大きな理想と小さな徹底
～対極を意識した年輪経営～

白井市立大山口中学校長　髙橋（たかはし）　紀子（のりこ）

1　はじめに

「生徒指導困難校から育てる学校へ」
着任当初に先生方と約束した言葉である。

本校は創立43年目を迎える歴史ある中学校で、北総教育事務所管内でも大規模校として知られている。現在も特別支援学級を含め22学級である。

しかし、これまでの道のりには多くの紆余曲折があった。生徒指導に困難をきたす時代も長くあったためか、今でも生徒指導に関する目標に「○○しない。」という表現が残る。

そして先生方と生徒の関わりも、「育てる視点」より「指導する視点」に重きが置かれているように思えた。

そこで、生徒の主体性を大切にした「育てる学校」への転換に向けて、職員と共に歩んできた遅々とした実践を紹介したい。

2　小さな徹底を地道に行う

経営の理念を「だれ一人も取りこぼさないこと」そして「社会貢献への素地を育むこと」とした。

めざす学校像には「大きな理想と小さな徹底」を掲げた。物事は簡単なことほど継続が難しく、容易に徹底することができない。

また、小さなことほど意味をもち、継続することが人を育てる。まさに「言うは易し行うは難し」である。

そこでまず、目に見える化を図るために学校全体で昇降口の「靴をそろえる」ことから始めることにした。全校が徹底するまでにはかなりの時間がかかったが、昇降口が次第に整っていくことがなぜか生徒の落ち着きにもつながっていった。そして「傘をそろえる」「雑巾をそろえる」「学習環境を整える」というように、当たり前のことを一つ一つ徹底し、その都度評価しながら場を整えていくことを共通行動とした。

この可視化された小さなことの徹底と継続は一体感を育むだけではなく、生徒や職員の心に直接作用し、自分自身を律していくための大きなツールとなっていったのである。

大きな理想と小さな徹底。この対極にあるものを意識し、調和させながら、一つ一つを丁寧に積み重ねていく。まさに木の年輪と同じような歩みである。

3　無言清掃から自問清掃へ

本校がステップアップしたことの一つに掃除への取組がある。本校は無言清掃が定着しているが、それを更に進化させ「生徒の成長につながる自問清掃にしていこう。」という声があがった。

とかく掃除は、指導する教師と生徒との関係が成立しがちである。が、この自問清掃では先生は生徒と一緒に掃除をする。生徒は自分の分担を終えたらそれぞれの「気づき清掃」へと取りかかる。そしてその「気づき」を自分の掃除ノートに振り返り、新たな課題を見つけていく。そこには教師の指導や指示はなく、ほとんどが生徒の主体性で成り立っている。

そんな自問清掃の時間は本当に静かに流れる。生徒が自分自身と向き合う掃除。毎日積み重ねていくことで思考の広がりや心の落ち着きにつながり、生徒たちは明らかに成長を遂げていった。まさに魔法の掃除である。

いつか、生徒の全ての分担を取り払い、学校全体でフリー清掃にチャレンジしたいと思う。

ここに生徒の掃除振り返りノートの振り返りを紹介する。

○保健室の入り口のテープの跡を完全に落とせたので、ソファーの下や机の下など床掃除を念入りにした。テープ跡の掃除が終わったので、沢山できるところが増えた。明日からは細かいところを中心に掃除したい。

○消火器の近くや裏にはほこりがついていたのできれいに拭くことができた。壁の汚れはとれるものととれないものがある。次はもっと視野を広めたい。

15分間の掃除で、生徒たちはものを見る視点が変わり、他者と比較する自分ではなくなる。この自問清掃をさらに深めていけば、生徒自身の自己肯定感の向上や生きる力につながり、学校の礎となっていくことを確信した。

4　令和の教育へ……学びの進化

⑴生徒をリスペクトすること

「生徒の小さな成長を認められる教師に」

「生徒の姿は教師の鏡である」

教師自身が生徒の範となりうる人間になることを常日頃から確認し、研鑽し合ってきた。

コロナ禍の中では失ったものもたくさんあったが、改めて思い知らされたものもある。それは生徒の素晴らしさだ。教師が生徒に勇気づけられ、力をもらい、失ったものを埋めてもらった。

教育という営みはラテン語のeducare（エデュカレ）に由来し、「引き出す」という意味をもつ。生徒の力をリスペクトし、その力を引き出していくのが教育に携わる者の使命である。学習指導要領も全面実施となり、社会も劇的に変わっていく。令和の教育を推進していかなければならない今、生徒と共に学びを創り上げていく教育活動の展開を目指した。

⑵学習評価の改善をチャンスに変える

昨年度から校内研修の充実を図った。学習評価が変わることをチャンスとして評価方法の精度を高める研修を重ねてきた。白井市の学校支援アドバイザーである川村学園女子大学の田中 聡教授や北総教育事務所の先生方を継続的に講師として招聘し、授業改善の視点をご指導いただいた。

その中で共通して定着させてきたことが、二つある。①意欲を高めるための予習への取組。②学習課題をゴールにつなげていくこと。

指導と評価の一体化に向けて教師が生徒に付けたい力を明確にしていくことを第一として現在も授業研鑽を積んでいる。さらに、今年度はタブレットも個々に整備され、その効果的な活用も授業改善の一端を大きく担う。社会の変化を受け止め、豊かな学びを提供できる場。学校は成長の場である。

5　おわりに

時代が令和となり、３年が経つ。令和の教育を推進していくことは教育の未来を描いていくことだ。常に大きな理想をもち、足下を照らしながら歩んで行くことの大切さを痛感する。「100年後を楽しむためには人を育てよ。」偉大な先人の残した言葉を今、かみしめている。

学校を支える

子供たちへの良い影響と新しい学校生活様式 ～大人がタッグを組んで雰囲気づくり～

木更津市立清川中学校教頭　髙橋（たかはし）　健悟（けんご）

1　はじめに

本校は、昭和60年に開校し、木更津市内の中学校では一番新しい学校である。地域の特性としては、木更津市の南東部に位置し、袖ケ浦市に隣接している。小櫃川に沿った純農村地帯であったが、京葉工業地帯の造成と君津市への新日鐵の進出等に伴い、住宅や団地が造成され、農業を主とする地域から新興住宅地へと変容してきた。また、平成31年度の学区編成により、中学校区の小学校は三つに再編された。生徒数は、創立後から減少が続いていたが、宅地造成により平成19年度から増加に転じ、今年度は332名である。今後は緩やかな減少が予想される。

私は新任教頭として本校に赴任したことに感謝の気持ちをもち、子供たちのために、今までとは違う立場から教育に携わり、生徒の成長に関わっていきたいと思っている。また、若年層の職員が増えてきているので、教師という仕事の魅力を伝え、日本の未来を背負う子供たちの成長を共に支援していきたいと考えている。そのためにも、『明るく！元気に！真剣に！』を意識し、毎日元気に生活することを心がけている。

2　心がけていること

⑴風通しの良い職場づくり

職員間の良い雰囲気は、子供たちにも良い影響を与え、より良い成長につながる。また、職員の不祥事防止やコミュニケーション能力の向上にもつながると考える。そして、風通しの良い人間関係が職員同士の学び合い、教え合い、支え合いを生み、成長する職員集団を育成する。私は、自分自身が笑顔を忘れずに仕事に邁進し、話しやすい雰囲気を作り、明るい職場づくりに率先して取り組むことを心がけている。このことが、私自身や職員、生徒の成長につながるという信念をもって実践している。

⑵学校と地域、学校と家庭の橋渡しとして

子供のために、地域や家庭とコミュニケーションを取り、より良い環境等を大人が考え、実践していく場を増やしていきたい。学校・地域・家庭が連携する、すなわち、大人がタッグを組むことが、子供の成長に大きな影響を与えると考える。その他にも、保護者からの相談は親身になって話を聞いたり、様々な方とコミュニケーションを図ったりすることで、人間関係を深め、子供たちや保護者、地域に信頼される学校づくりに努めていきたいと考える。

3　コロナ禍での取組

私が新任教頭として赴任した令和２年度は、子供たちが５月後半まで登校しない状態から始まった。学校として何ができるのかを、校長の指導の下、職員全員で知恵を絞り、試行錯誤しながら実践してきた。令和３年度も感染症は終息せず、毎日『今、何ができるのか』を考えている。コロナ禍をプラス思考でとらえ、良い機会とするために、必要なことは何

か、削減することは何か、新しくやるべきことは何か等を吟味しながら、新しい学校生活様式をつくり上げていきたい。本当に必要なのか、そうでないのかをしっかりと考えていくことが重要である。このことは、働き方改革にもつながると感じている。不易と流行を意識し、新しいスタイルを確立していく時期であると考える。

新しい授業形態

4　今できること

教頭として今できることは何か？を考え、大きく二つのことを実践している。

一つ目は、笑顔で接することである。風通しの良い職場をつくるためには、信頼関係を構築していかなければならない。そのために私は、笑顔で大きな声の挨拶や目を合わせて会話をすることを心がけている。忙しさゆえに忘れがちなことだが、大変重要なことだと認識し、実践を心がけ、自分自身の成長につなげていけるようにしている。

二つ目は、学校のホームページを毎日更新することである。コロナ禍で保護者が来校することが減ってきている状況の中、学校の様子を少しでも伝えるため、毎日ホームページを更新している。校長の意を汲みながら学校の様子を伝え、保護者や地域の方に応援される学校にしていきたい。

以上のことは、教頭でなくてもできるのではないかという意見もあるが、管理職である教頭が率先して行うことが重要であり、これが職場の良い雰囲気につながり、ひいては、子供たちに良い影響を与えるという信念をもって取り組んでいる毎日である。

5　おわりに

私は教頭として、校長の指導の下、『仕事は厳しく、職場は楽しく』をモットーに、服務勤務管理には厳しく、人間関係には温かみをもって、良い関係を形成していくように心がけている。そのために、自分自身がいろいろな立場の人たちと積極的にコミュニケーションを図り、生徒の成長に貢献したいと考えている。

信頼される学校、安心で安全な学校、子供が笑顔で生き生きと過ごせる学校を目指し、校長の補佐役として教育に携わっていく所存である。子供たちの真剣な表情、笑い声などを糧にしながら……。

学校を動かす

調整力を働かせること

県教育庁北総教育事務所指導主事（前県立船橋法典高等学校主幹教諭）　菅（すが）　太郎（たろう）

1　はじめに

平成23年度から令和２年度まで10年間県立船橋法典高等学校に勤務し、令和２年度は、同校で主幹教諭として１年間校務を行った。今年度、県教育庁北総教育事務所指導室に異動となったが、以下に、前任校において主幹教諭として行ってきた実践例を紹介する。

2　主幹教諭としての実践

⑴フットワークを生かして

学校組織の強化を目的に、管理職と教職員とのパイプ役として、分掌間・学年間の調整を図るなど、校内のコミュニケーションが円滑に行われるよう改善を行った。具体的には、学年室や教科指導準備室、保健室、事務室に自ら足を運び、様々な教職員との気軽な情報交流や会話を増やした。生徒の状況や課題、教職員の悩みなどを聞くことにより学校全体の状況を把握し、組織の活性化を推進した。

⑵生徒指導主事として

生徒指導規程の見直しや適切な運用のために、定期的に生徒指導部会を開き、適切な指導方法や具体的な改善策を話し合った。さらに、船橋地区生徒指導連絡協議会で、各校の生徒指導規程の状況や生徒指導における情報交換やアンケート等を行い、他校との共通理解や連携を図った。

⑶教育相談委員会での情報収集と調整

毎週金曜日に各学年の教育相談担当教諭、養護教諭、スクールカウンセラー、特別支援教育コーディネーターで教育相談委員会を開き、各学年の生徒の情報交換や支援の見立てを行った。結果を管理職に報告し、課題解決が困難な事例や状況に応じて外部機関と連携できる体制を確立した。その内容について、翌週の月曜日の朝の職員の打合せで情報共有等を行った。

⑷校内研修指導教員としての活動

初任者研修では、年間指導計画に基づき、教科経営（相互参観・研究授業・教材研究・指導案作成・生徒指導の機能を生かしたわかる授業）・学級経営、部活動経営等について、自分の失敗談や上手くいった経験を踏まえながら指導した。また、初任者との対話を大切にし、シミュレーションを取り入れた研修を多く行い、意欲喚起を図った。

3　おわりに

高等学校10年間で担任・教務部・総務部・生徒指導部等で先輩教諭と一緒に校務を経験することで、仕事のやりがいや苦労を実感することができた。「チーム学校」として、学校組織をより活性化させるためには、相手の立場を考えて行動することや人と人とのつながりを大事にすることが重要であると学んだ。また、他の教諭が困っていたら、進んで手伝ったり、共に解決の方法を考えたりする等、寄り添いながら問題を解決することが必要である。私自身、船橋法典高等学校の先輩教諭から多くのことを学び、数々の恩恵を受けてきた。『人づくりの学校』、『生徒一人一人を大切にした教育』が受け継がれていくことが大事であると考える。管理職をはじめ、同僚・生徒・保護者に支えられたことに感謝し、これからの教育に邁進していきたい。

子供を知る

幼児理解をする大切さ

市川市立大洲幼稚園教諭　柿原（かきはら）　香澄（かすみ）

昨年度は４歳児の担任として大きな期待とともに不安を感じていた。教科書どおりではない多様な子供の姿に戸惑いを感じ、思うように動くことができなかった。保育技術不足であると痛感しながらも、一人一人に丁寧に関わりながら、様々な場面で信頼関係を築くことに努めていった。子供の行動の背景には、何かしらの理由があることに気付き、その気持ちに寄り添うことが大切であると感じた。

学期ごとに一人一人の育ちの振り返りを行った際に、幼児理解への甘さに気付いた。そこで、遊びの中で、子供はどのようなことを感じて育っているのかを考えながら関わったり、見守ったりした。子供の行動を振り返り考察することで、新たな援助の仕方が生まれることや、遊びを通して育っている部分にも気付くことができた。今後、職場の先輩方と子供の情報交換をして、多角的な視野で幼児の姿を捉え、理解を深めていきたいと思う。

現在、５歳児の担任をしている。昨年度からの信頼関係を土台とし、就学に向けて、一人一人が個々の力を出し、それぞれの得意なところを伸ばしながら、輝いていけるよう、心掛けている。

これからも初心を忘れずに、常に自分の姿を振り返り、保育力向上に努めていきたい。そして子供たちと一緒に成長していきたい。

子供を知る

給食を「食の教材・授業」として活用する

松戸市立矢切小学校技師（栄養士）　潮田（うしおだ）　萌恵（もえ）

学校の栄養士として勤務して二年。児童の成長を支える給食運営と食に関する指導を行う中で学んだことが二つある。

一つ目は、継続的に指導や情報発信をすることである。毎日、給食時間の巡回指導や献立に合った一言メモを配付したところ、苦手なものも食べようとする児童が増えた。食への興味関心が高まり「おいしかった」「食べられるようになった」など声をかけてくれるようになった。巡回指導では直接反応や感想を受け取ることができる一方、「前向き無言給食」を徹底しているため、言葉のキャッチボールに制限があるもどかしさを感じた。給食を通して、継続的に指導することで子供たちとコミュニケーションがとれることを学んだ。

二つ目は、授業と連携して食に関する指導を行うことである。SDGsの観点から食品ロスの授業を行ったところ、明らかに残菜が減少した。「残すとゴミになる」「一口でも多く食べよう」という意識が形成され、授業の効果が感じられた。授業展開は難しく悩むこともあるが、子供たちの豊かな発想に触れ、新しい発見がある授業は楽しく、私自身学ぶことが多かった。これからは、発問の仕方や授業のテンポなどを工夫して授業を行いたい。

これからも、給食を昼ご飯として捉えるのではなく「食の教材・授業」として活用し、食べる重要性や楽しさを伝えられる栄養士を目指したい。

授業を創る

理科学習における考察の場面を充実させるために ～視点を明らかにした指導～

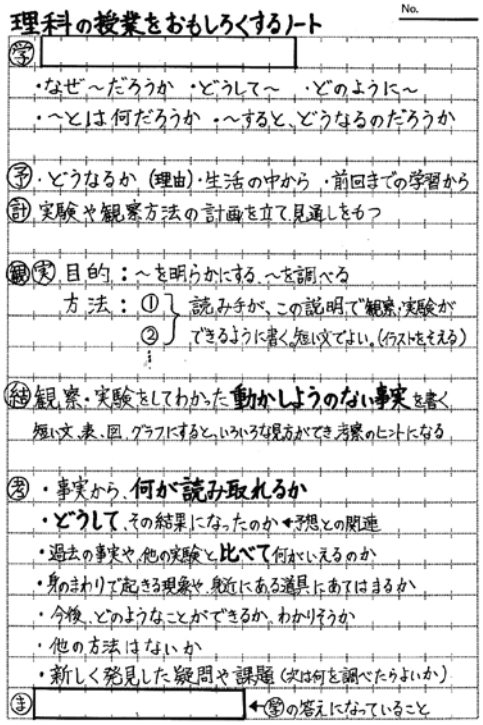
四街道市立吉岡小学校教諭　中村（なかむら）　光宏（みつひろ）

1　はじめに

理科に関する書籍や研究授業の学習指導案を目にする機会はたくさんある。実態を把握する調査結果では、観察や実験は「好き」「楽しい」と回答する児童の割合はとても高い。しかし、考察については「好きではない」「得意ではない」といった回答が多くなる。「考察は実験と同じくらい楽しいのに。」と私は思っているが、指導する側においても苦手意識があるようである。その改善の一助となればと考え、私なりの実践を紹介する。

2　考察の場面に至るまでのアプローチ

年度初めに理科の授業の流れについて確認する機会をつくっている。（資料１）



資料１　理科の授業の流れ

ここでは、考察を書く視点として七つを挙げている。考察を書くことに苦手意識をもっている児童にとっては、何を書いてよいかわからないという困り感がある。こうした実態を把握しているからこそ、まず視点を与え、それに沿った考察ができるようにしている。「事実から何が読み取れるか」「どうしてその結果になったのか」「過去の事実や他の実験と比べて何がいえるのか」は取りかかりやすい視点と考えている。

考察を書ことが得意な児童には「他の方法はないか」「新しく発見した疑問や課題」という視点を挙げている。観察・実験から得られた事実を整理することができる児童には発展的な考えをもつ機会を促すためである。

児童に意識させておくことは、毎時間七つの視点に沿って七つの考察を書くのではないということだ。ある実験結果が気になり、そのことについてじっくり考えていたら時間がなくなり、三つくらいしか書けなかった、たくさん発見があり、どんどん書いていったら八つ以上書けていた等、観察・実験の内容によって増減があってよいのである。大事なのは集中して考える活動ができているかではないだろうか。

もう一つ、アプローチで大切なことは予想をしっかりもたせることだ。理由まで考えることにより、観察・実験をした後に「思った通りになった（ならなかった）のは○○という理由だ。」と考えやすくなるからである。

3　考察の実際

考察を書くことに抵抗感がなくなってくると指導者が指示をしなくても、観察・実験が終わるとすぐに児童は自分から考察に取り組むようになる。真剣に取り組んでいる雰囲気を感じたら「この雰囲気がいいね。」とすかさず称賛すれば、児童は更に集中していくのである。「雰囲気」は感覚かも知れないが、私の経験上、この積み重ねが考察する力を着実に向上させていくと感じている。

資料２は児童のノートから考察を抜粋したものである。

評価をする際には、一つの考察につき１ポイントで評価している。深い内容である場合は２ポイント、３ポイントと加点する。資料にはないが、友達の考えを書いた場合には㊝とし、ポイントには含めない。

結　　単位(g)

班	1	2	3	4	5	6	7	8
とかす前	156	122	139	134	122	131	132	126
とかした後	156	122	138	134	122	131	131	126

考
Q1 8班中6班が同じだったことから、水に食塩を入れても重さは変わらないと言える。
Q2 変わらないと言うことは食塩は水の中にあると言える。
Q3 重さが重くならなかったのは、食塩は水の一部になっているからだろう。
Q4 重さが軽くならなかったのは、食塩は、きゅうしゅうもじょう発もしなかったからだろう。
Q5 ねん土と同じように、形が変わってしまっても、重さは変わらないと言える。
Q6・7 全ての水よう液が重さが変わらないのだろうか。
Q8 食塩は水に入れると水に見えなくなるのは、どういった現象から起きているのだろうか。
Q9・10 お湯と水ではちがうことがあるのだろうか。
Q11 水よう液は水＋とける物

資料２　児童の考察

私のこだわりは、ポイントを加算方式にすることである。考察全体を評価して「100点」「Ａ」とすると、児童の考える力の向上に指導者自らがブレーキをかけてしまっているように思えるからである。加算方式にすることにより、「ある程度考えてもさらに考えてみよう」「今度は異なった見方で考えてみよう」等、そのような意識が生まれるのではないだろうか。考察を深めたり広げたりする活動に制限をかけることなく、児童がのびのびと活動できる学びの場を確保しようと考えている。

考察の場面の流れは、個人→グループ→全体である。コロナ禍であることから、個人で考察を書く時間を長く取り、グループでの意見交換を短時間で行っている。

しかし、本来であるならグループでの意見交換や全体での考えの整理にもっと時間をかけたいところである。視点を与えていることから、児童は自分自身で考えた意見を最低でも三つくらいはもつことができる。その状況でグループにおける意見交換を行えば、学習活動はとても充実していく。学んだ内容が「わかる」から、言葉にすることにより「できる」に高めることができるからである。タブレット端末の扱いに慣れてくれば、話すことに制限がある中において意見交換ができる手立てとなると思っている。

4　おわりに

私は理科の指導を楽しく感じながら実践している。最近感じることは、やはり指導者が楽しめないと授業は充実しないということである。指導することに困り感があると耳にすることも多いが、充実感を得やすい教科でもある。今後も指導力向上に努めていきたいと考えている。

授業を創る

「肯定的な自己理解」を目指した、特別支援学級での授業の工夫

大網白里市立大網中学校教諭　行木（なみき）　陽子（ようこ）

1　はじめに

障害の有無に関わらず、思春期に大切なのは「肯定的な自己理解」である。苦手な部分があっても、うまくいかないことがあっても「大丈夫、何とかなる。」と思えることが、人として生きるときに大切な自己肯定感となる。しかし、さまざまな困難さを抱える、特別な支援を要する生徒たちにとって、「肯定的な自己理解」はとても難しいことである。他と比べてしまうと、得意なことを発見したり、苦手なことの「方略」を見つけたりすることは、自分だけではできないからである。

そこで重要な役割をもつのが授業である。

毎日受ける授業が、「できない自分と闘う忍耐の時間」ではなく、「できた」「わかった」「頑張った」と思える時間になれば、彼らは確実に「肯定的な自己理解」をすることができる。

2　何を、どのように学ばせるのか

⑴目標設定を通してのコミュニケーション

特別支援学級に通う生徒の実態は、習熟度もやる気も実に様々であるが、自信がもてない中、不安と闘ってきたので、自分のできない部分についてよくわかっている生徒が多い。そのため、本人の気持ちをじっくり聴き、課題をよく観察して、目標と学習内容を話し合いながら決めていく。本人の納得があれば、どんな生徒も学習内容の吸収がよくなり、集中して取り組むことができるようになっていく。

また、注意深く様子を見て、生徒の意欲に変化が見られた際には、再度声をかけて話し合う。相手の「拒否」を受け入れることは、コミュニケーションの第一歩と考えているので、前向きになれない理由を生徒が言語化できたら、それを認め学習内容や目標を変える。これを繰り返すことで、態度で示さずに言葉で表現するようになる。

⑵「考える」活動をあきらめさせない

授業は、下の図のように50分を三～四つの活動に分割して構成する。

《授業の流れ：数学の例》	《授業の流れ：国語の例》
①数感覚トレーニング	①漢字練習
②計算トレーニング	②漢字確認テスト
③分数	③文章問題
④スピード（トランプ）	④リフレッシュタイム

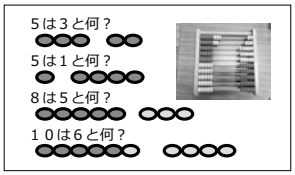
数学では二つ目の活動までは、基礎的な計算、三つ目の活動に少し努力を要するような「考える」活動を入れる。国語では二つ目までを漢字の活動、三つ目に文章の読み取りや問題に取り組む活動とする。計算トレーニングのような基礎的な問題をゲーム感覚で取り組ませると、「わかった」「楽しい」と感じ、自信がなかった「考える」活動に対しても、主体的に取り組むようになる。そして、それを繰り返していくことで、少し難しい問題にも挑戦しようとする姿勢が見えてくる。知的好奇心が刺激され、クイズやなぞなぞを解くように、「考える」活動にも取り組めるようになってくる。

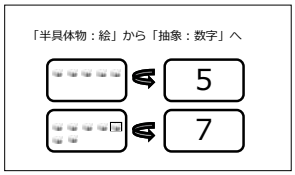
また、苦手な学習にはリフレッシュタイムも有効である。生徒と話し合いながら、どの場面でリフレッシュをするのかを決める。

⑶想像しやすい工夫
－具体物と操作性と言語化－

①数感覚トレーニング

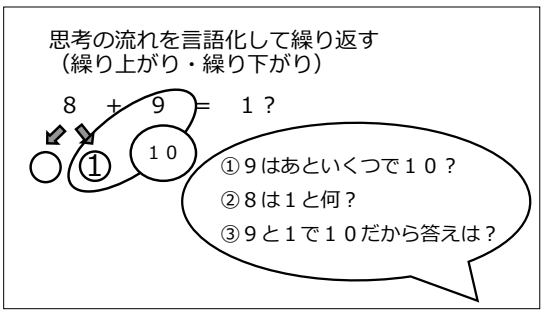
繰り上がりと繰り下がりの計算で、手を見て数える生徒は意外に多い。時間がかかっている生徒の中には、想像しながら頭をふって数えていたり、机の下で指をひざに乗せ数えて計算していたりする生徒もいる。そういう生徒たちには、「大玉そろばん」など、具体物を使い、５や10、数の合成と分解の「数感覚トレーニング」を行う。



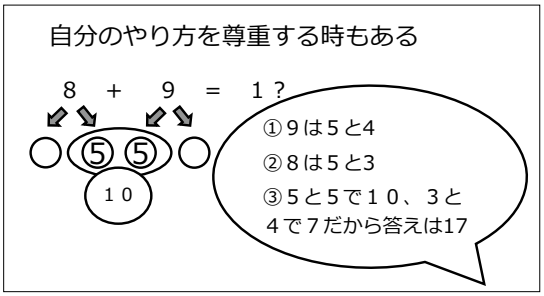


②思考の流れを言語化する

思考の流れを言語化することは、自分を分析する上でとても大切な力となるが、計算でも、記憶の助けとなり有効であると考える。



計算の仕方で、自分のやり方にこだわる生徒も多い。間違っていなければ、そのやり方を無理に変えることはしない。手順が複雑で時間がかかっている場合には、素早く暗算するために違うやり方が有効であることを体験させ、受け入れるよう促していく。



③計算式は、状況を言語化する

足し算や引き算で、式の表している状況を想像させるために、生徒の頭の中で、想像しやすい状況設定を一緒に考える。正負の計算で数直線を使うと、どうしても数えて計算してしまうので、「給食の唐揚げが３個足りませんでした。給食室から５個届いたら、唐揚げは足りますか？余りますか？」など、その生徒の想像しやすい状況で考える。式だとなぜかわからなくなってしまう生徒も、瞬時に答えが出ることが多い。

④英単語の並べ替えは、小さなカードで

英語の授業では、小さなマグネット付きの単語カードを作り、ホワイトボードに並べ、実際に手を動かして、並べ替えをしている。英文を書く際に、混乱することが多かった生徒も正解率が上がってきている。

⑤漢字は、筆ペンやチョークを持って

漢字を覚えるのが苦手な生徒に、時折、筆ペンを使ったり、黒板にチョークで大きく書かせたりしている。部首を意識させながら、ゆっくり大きく体を使って書くことで長く記憶に残り、後から思い出しやすいようである。

3　おわりに

特別な支援を要する生徒と関わると、生徒たちは自分についてたくさん考えてきたのだと感じることが多い。それと同時に「自分は駄目な人間だ。」と決めてしまっている生徒も多いと感じる。そんな彼らが授業の中で、「わかった」「できた」を積み重ねることで、「もっと頑張ろう」と思えるようになってくる。こだわりの強い生徒が多く、うまくいかないこともあるが、思考の流れを整理し、考えることの楽しさを味わわせることで、生徒たちは、何事にも主体的になっていく。これからも、生徒と共に工夫しながら「授業を創って」いきたい。